

訳読と解説

『笑門』を読む（二）

磯部 祐子

富山大学人文科学研究第77号抜刷
2022年8月

『笑門』を読む(二)

磯部 祐子

一、はじめに

『笑門』は、寛政九年(一七九七)、濱釣散人によって記された全三十八話からなる漢文笑話集である。筆者は、『笑門』を読む(一)、『富山大学人文学部紀要』第七六号)において、作者・濱釣散人について「朱子学を学んだ文人」と推定したのち、前半部分、すなわち序及び第一話から第二十一話までの訳読と解説を行った。小稿は、後半の第二十二話から第三十八話について訳読と解説を行ったうえで、『笑門』の特徴及び文化史的背景を論じる。

二、本文

② 癡子

【原文】有癡子。其父歎云、汝不辨生活之道。吾没殆其飢哉。癡子對曰、大人勿憂。吾素能健啖。
【書き下し文】癡子有り。其の父、歎じて云ふ、汝、生活の道を辨せず。吾没せば殆んど其れ飢えん、と。癡子對へて曰く、大人憂ふることなかれ。吾、素能く健啖す、と。

【現代語訳】愚鈍な息子がいた。父は嘆いて「お前は、生きる術をわきまえていない。俺が死ねばきつと飢えるだろう」と言うと、愚鈍な息子は答えた。「お父さん、心配しないで。僕はもともと何でもよく食うから」

【解説】息子に生計の術が「ない」ことを案ずる父と、食欲が「ある」から心配するなど答える息子。理解の行き違いが生む笑いである。次の小咄も、生計の方法（何で飯を食うか）を尋ねたことに、食事の方法（焼き味噌）で答える愚か話である。

○たらぬとおもへど男の子じやと、ふたおやのたのしみ。十四五になりて、おやの目にもあまり、コリヤ長松よ。てまへハもふいくつだとおもふ。来年ハげんぶくもせねばならぬぞよ。いつもくおなじのらでハすまぬ。手ならひハきらい、そろばんハおほへず。マア何でめしをくわふと思ふ。むすこやきみそで。（『聞童子』「長松」安永四年）

㉓新室

【原文】一夫新造室移居焉。友人來賀。一友人熟視室中云、美則美矣。恨門戸狭小棺槨之不出。主人大怒云、吾室始成、故諸友皆賀之。子何獨言棺槨之不出乎。友人謝云、前言過而已。棺槨可能出。

【書き下し文】一夫、新たに室を造りて移居す。友人來たりて賀す。一友人、室中を熟視して云ふ、美は則ち美なり。恨むらくは門戸狭小にして棺槨の出でざることを、と。主人、大いに怒りて云ふ、吾室始めて成る、故に諸友皆之を賀す。子、何ぞ獨り棺槨の出でざるを言ふや、と。友人謝りて云ふ、前言は過つのみ。棺槨は能く出づべし、と。

【現代語訳】ある男が新築して居を移した。友人たちがお祝いに來た。一人の友人が部屋中を見回して、「素晴らしいことは素晴らしいが、入り口が少々狭くて棺を出せないのではないかな」と言った。主人は怒って、「家が出来上がって友人たちが皆祝ってくれているのに、おまえだけどうして棺を出せないなどというのか」と言うと、その友人は謝って言った。「さっきの言葉は間違いだ。棺は出せるよ」

【解説】寿ぐべき新築の祝いの日に、忌むべき棺桶のことを話題にした後でその失態に気づき、それを取り繕うとするが結局また忌む

言葉を口にしてしまうという愚か話である。次の小咄の漢文訳かと思われるが、小咄にある「以の外立腹し、何共不吉千万と、膝立なをせバ」という亭主が色を作す表現については十分に漢訳されているとは言えまい。

○新宅の祝義、扱よいお住居と誉る所へ、そこつ者、あつたら事に、間口がせばくて、葬の時、棺が出まいといへバ、亭主、以の外立腹し、何共不吉千万と、膝立なをせバ、ア、これく、随分出るく。(『一の富』「移徙」安永五年^二)

この他、『軽口太平楽』「粗相な男」^三、『軽口豊年遊』「そ、うな男」^四、『軽口筆彦咄』「新宅悦」^五、『笑の友』「言直し」^六、三村其原『花間笑語』^七などの類話がある。なお、これらの類話については、先行する湯城吉信氏の論稿「花間笑語」と江戸小咄との関係について^八においてすでに紹介されている。

②4 法問

【原文】俗客與禪師法問屢見屈。乃攘袂大聲曰、頭陀何屈余。師大屈。

【書き下し文】俗客、禪師に法問して屢しば屈せらる。乃ち袂を攘ひ大聲して曰く、頭陀、何ぞ余を屈する、と。師大いに屈す。

【現代語訳】俗客が禪師と法問してしょっちゅう言い負かされている。そこで袂を払って大声で「坊さん、どうして俺を負かすのか」と言ったので、禪師が答えに窮してしまった。

【解説】素朴な疑問による切り返しによって相手を言い負かす禅問答は、江戸期の一休咄としてよく知られる。本話もそのような一話

二 『嘶本大系第十卷』二二二頁。

三 『江戸小咄辞典』(武藤禎夫、東京堂出版、一九六五)七八頁。

四 『嘶本大系第八卷』二二九頁。

五 『嘶本大系第十二卷』二九九頁。

六 『嘶本大系第十四卷』八、九頁。

七 『花間笑語』第六話(『国文学未翻刻資料集』桜楓社、昭和五六年、四六一頁)。

八 『大阪府立工業高等専門学校校研究紀要』(二〇〇三、第三十七卷)五二頁。

と言える。

㊦書籍

【原文】夏日書生出于市、見一店有萬卷書、過而見之。又問其所欲之書、主翁便循其所請之標題、悉出視之。及其價之、主翁云、吾家固非書肆、今日適晒藏書耳。

【書き下し文】夏日、書生市に出で、一店の萬卷の書有るを見て、過りて之を見る。又、其の欲する所の書を問へば、主翁便ち其の請ふ所の標題に循ひて、悉く出だし之を視せしむ。其の之に價するに及びて、主翁云ふ、吾家は固より書肆に非ず、今日適たま藏書を晒すのみ、と。

【現代語訳】夏のある日、書生が市に出で、たくさんの書物が置かれた店を目にし、近寄って見た。(書生)が欲しい本について尋ねると、古本屋の主はその書名に従ってすべて持ってきて見せてくれた。(しかし、その書生が)本に値をつけ始めると、古本屋の主人は言った。「うちは本屋ではなく、今日はたまたま虫干ししていただけです」

【解説】安く本を買おうとする書生を撃退するために用いた方便が落ちである。類話は未見。

㊧厄年

【原文】除夜或到友人許謂云、予來歲二十五、經云大忌不可安之年也。當奈之何。友人為策云宜出奔。

【書き下し文】除夜に或ひと友人の許に到りて謂ひて云ふ、予、來歲二十五、經に云ふ、大忌は安んずべからざるの年なり。當に之を奈何せん、と。友人為に策して云ふ、宜しく出奔すべし、と。

【現代語訳】除夜に、ある人が友人のもとに行つて「私は、来年二十五歳。厄年は、いろいろ起こつて安心できない、とよく言いますが、どうしましょう」と言つた。友人は策を講じて一言。「出家しなさい」

【解説】かつて、明年の厄を避けるために、前年の大みそかに「めでたいこと」を言って厄払いをするのが習わしだった^九。厄年については、『和漢三才圖會』卷五曆占部「厄歳」^{一〇}に、「按素問陰陽二十五人篇云、件歳皆人之大忌、不可不自安也。考之初七歳以後皆加九年。今俗別男女厄男。二十五、四十二、六十一」と見え、二十五歳は男性の厄年であったことがわかる。本話は、厄を避ける「すべ」を友人に尋ねたことに対して、真正面から「出家せよ」と勧めてしまい、本来言うべき「めでたいこと」は言わなかった一話。理解の違いによる食い違い話といえる。類話は未見。

②7 釣魚

【原文】或出釣得魚甚多。癡僕異問云、主公獲如此、何絶無釣枯魚。

【書き下し文】或ひと出でて釣し、魚を得ること甚だ多し。癡僕、異^{あや}しみ問ひて云ふ、主公^{えもの}の獲^二此くの如し、何ぞ絶えて枯魚^三を釣ること無きと。

【現代語訳】ある男、釣りに行ってたくさんの魚を釣った。愚かな下僕が不思議がって次のように聞いた。「ご主人の釣った物はこんなにたくさんあるのに、どうして干物が一匹も釣れなかったのですか」

【解説】魚の干物も魚の中。それなら釣りに行けば干物も釣れるはずという愚か話。「癡僕」が発した問いに設定して笑い話に仕立てている。類話は未見。

九 『江戸小咄辞典』（武藤禎夫、東京堂出版、一九六五）四二―頁。

一〇 国立国会図書館デジタルコレクション『和漢三才圖會』（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/898160/128>）（二〇二二年、三月三日閲覧）。

一一 右訓に「エモノ」とある。

一二 左訓に「ヒモノ」とある。

②8 匏瓜

【原文】年少出途、望見旁家有婦人自牖出半面。乃斂^三衿過之。既顧之則徒繫匏瓜也。

【書き下し文】年少途^{みち}に出^いで、旁家に婦人有りて牖より半面を出だすを望見す。乃ち衿^{せき}を斂^{おさ}めて之^を過^する。既にして之を顧みれば則ち徒^ただ匏瓜を繫^くぐなり。

【現代語訳】ある年若い男、道に出て、臨家の女性が窓から顔を半分のみかかせているのを遠目に見た。そこで衿を整えてそこを通り過ぎた。しかし振り返ると、ひょうたんが繫がれているだけだった。

【解説】類話に『聞上手』（安永二年一七七三）「色白」があり、その翻案と思われるものに漢文笑話集『笑堂福聚』「色白」（享和甲子一八〇三）がある。両話には、ひょうたんや白磁の徳利を遠くから眺め美人と勘違いし、その近くを緊張しながら通り過ぎる若者の姿が描かれる。また、若者は、両話とも「色男」^{一四}に設定されているが、本話はただ「年少」と記され、「色男」のもつ雰囲気は訳出されていない。

○御屋敷のまど下を通ふるに、何か美しいやつが出てゐる。さすがの色男も、ちとりきみが付て、わきめもふらずとをり過て、ふりかへり、まどをみれば、エ、ばかな、白鳥の徳利だ（『聞上手』「色白」^{一五}）

○何晏粉白不^レ去^レ手以自喜。嘗過^二銅雀之下^一、見^三臺上有^二白而艶者並坐^一。晏直行不^レ顧、去數十步、謂^二從者曰、汝等見^三臺上美白者^一乎。從者曰、否、小人但見^二臺上酒器陳列^一耳。未^レ見^レ有^レ人、况美婦人乎。晏不^レ信、反觀^レ之嚮白而艶者、白色定罍也。（『笑堂福聚』「色白」^{一六}）

一三 原文は「斂」に作るが、文意から「斂」に改める。

一四 『笑堂福聚』においては、登場人物を「何晏」に設定している。「何晏」は魏の政治家で、ハンサムでナルシストであり、いわば「色男」の代表でもある。

一五 『斬本大系第九卷』五九頁。

一六 磯部祐子『笑堂福聚』を読む（三）（富山大学人文学部紀要第七十三号、二〇二〇年、三三三頁）。

②9 禁酒

【原文】嗜酒者絶不復飲。友人問其故、曰狂藥害於事、予向矢之鬼神、三年之間斷之。友人云性之所嗜未可俄斷之。請延三年為六年、而唯昼飲之、其何憚之有。諾從之。一日隣家會飲請之與飲。告之故以辭。隣人云、子將六年唯昼飲之也。今以六年為十二年而昼夜飲之、其何憚之有。

【書き下し文】酒を嗜む者、絶えて復た飲まず。友人、其の故を問ふ。曰く、狂藥は事に害あり、予、向に之を鬼神に矢ひて、三年之間、之を斷てり、と。友人云ふ、性の嗜むところ未だ俄かに之を斷ずべからず。請ふ、三年を延ばして六年と為し、而して唯だ昼のみ之を飲まば、其れ何の憚りか之有らん、と。諾して之に従ふ。一日、隣家會飲し、之を請ひて與へて^{一七}飲ましむ。之に故を告げて以て辭す。隣人云ふ、子將に六年唯だ昼のみ之を飲まんとす。今、六年を以て十二年と為し、而して昼夜之を飲めども、其れ何の憚りか之有らん、と。【現代語訳】酒好きの者が断酒して再び酒を飲むことはなかった。友人がその理由を尋ねた。すると、「酒は事を仕損じる。そこで、私は、前に神に誓って、三年間の断酒を決めた」というので、友人は「好きなものを急に断つべきではない。三年を六年に延ばしてはどうか。そして昼だけ飲めば何の差支えもないではないか」と言った。（酒好きの者が）納得してそれに従った。ある日、隣近所で集まって飲む時に、この人を招いて飲ませようとするが、理由を告げて断った。隣人は言った。「あなたは六年間、昼だけ飲むというが、六年を十二年にして、昼夜飲んだなら何の差支えもないではないか」

【解説】何とかして酒を飲みたいという酒好きゆえの方便話。本話は、断酒を決めた酒好きが、友人や隣人のアドバイスで、昼夜三年の断酒から夜ばかり六年の断酒へ、そして最後には昼夜十二年飲むことにする、というもの。断酒を意図して更なる飲酒に至る屁理屈話である。本話の類話が多いが、どの小咄に基づいたか判然としない。本話は、断酒をする理由を「狂藥は事に害」があるためという。この点、先行する小咄は、酒の肴談義をしたいが「願掛け」のために（『軽口瓢金苗』『調法な禁酒』延享四年^{一八}）、酒の肴に格好の蛸

一七 原文には「與」の右下に「り」とあるが、「與へて」と解する。

一八 『新本大系第八卷』一一五頁。

があるので飲みたいが「願掛け」のために（『軽口笑布袋』『禁酒』延享四年^{一九}）、寒さに一杯かわしたいが「願掛け」ゆえに（『軽口五色袋』『きん酒』安永三年^{二〇}）などと、いずれも「願掛け」のための断酒である。断酒の年数もそれぞれ異なり、三年、六年、十二年が多いものの、一年、二年、三年（『聞童子』『禁酒』安永四年^{二一}）、五年、十年、二十年（『太郎花』『禁酒』寛政三年^{二二}）もある。また、百日単位もある。よって本話が依拠した小咄について特定することは難しい。漢文による次の類話を挙げるに止める。

○一夕三人対酒、唯甲不举杯。問其故。甲曰、断酒百日、既誓于神矣。乙曰、蓋誓以二百日、不飲於昼、而飲於夜也。丙曰、未若更延四百日、而昼夜飲也。（『花間笑語』^{二三}）

③〇誣盜（盗を誣ふ）

【原文】盗人于貧家探宅中、無一物之可取。周旋之間、主人覺大呼。應聲比隣來集。主人曰、強盜穿牆而來捲衣箆器皿去不復留青氈。時偷兒猶竄在戸間、不忍聞之躍出曰、吾雖入此宅、未掠一物、汝何欺人。主人默謝云、公幸宥恕、吾適生心耳。

【書き下し文】盗、貧家に入り宅中を探るに、一物の取る可き無し。周旋の間、主人、覺めて大いに呼ぶ。聲に應じて比隣來たり集まる。主人曰く、強盜、牆を穿ち來りて、衣箆器皿を捲きて去り、復た青氈^{二四}を留めず。時に偷兒猶ほ戸間に竄在して、之を聞くに忍はずして躍り出て曰く、吾れ此の宅に入ると雖も、未だ一物も掠めず。汝は何ぞ人を欺く、と。主人默謝して云ふ、公幸ひに宥恕せよ、吾

一九 『喃本大系第八卷』一四五頁。

二〇 『喃本大系第十卷』二三頁。

二一 『喃本大系第十卷』一二四頁。

二二 『喃本大系第十三卷』三三九頁。

二三 『国文学未翻刻資料集』四七一頁。前掲注七参照。

二四 青色の毛氈。『晋書』卷八十「王羲之列伝」に、王羲之の子・王献之が、夜寝ていると盗人が入ってきて家の中の物を全て盗み取り、先祖の品である青色の毛氈も掠めようとしたので「偷兒、青氈我家旧物、可特置之。」と言ったとある。「青氈」とは先祖の遺物を指す。

れ適たま心を生ずる^{二五}のみ、と。

【現代語訳】盗人が貧しい家に入り家の中を物色したが取るようなものは何もない。動き回っていると、主人が目を覚まして大きな声で叫んだ。その声を聞いて隣人がやってきた。主人が、「盗人が扉に穴を開けて来て衣服を入れた箆や食器類を奪い、先祖の遺物さえ残していかなかった」と言った。その時、盗人はまだ戸の後ろに隠れていたが、その話を聞いて我慢できなくなり、飛び出て「私はこの家に入ったが、まだ何一つ手にしていない。どうして嘘をつくのだ」と言った。主人は黙礼して一言。「どうかお許しいただきたい。出来心でござります」

【解説】落語「出来心」と同じ趣向である。そのもともになったのは、寛政ごろに刊行された『絵本噺山科』『しな玉』のようであり、その後『江戸前噺鰻』『ぬす人』（文化五年）、『噺大全』『しな玉』（嘉永初年頃刊）などあるが、最後の落ちは、それぞれ「ついあのやうにしたのは、わたくしの出来心でござります」^{二六}、「あるしの権兵衛、ぬからぬかほて、イヤモ、ついほんの出来心でござります」^{二七}である。確かに、本文でも「生心」の左訓は「出来心」の意を表す「テキコ、ロ」である。「生心」は、『左伝』においても、「悪しき心を抱く」の意として、「戎之生心、民慢其政、国之患也。」（『左伝』莊公二十八年）のように用いられている。

③ 劍客

【原文】一士牌于簷頭曰、舞劍者某。或書刺候之、請為之弟子。士人低聲曰、足下勿多言。吾固不知舞劍、簷頭牌是為謾盜耳。

【書き下し文】一士、簷頭に牌して曰く、舞劍者某、と。或ひと刺を書して之を候ひ、之が弟子に為らんことを請ふ。士人、低聲して曰く、足下、多言する勿れ。吾れ固より舞劍を知らず、簷頭の牌は是れ盜を謾する為のみ、と。

【現代語訳】一人の武士が軒下に「劍術指南何某」の看板を掛けた。名刺を書いて（この武士を）訪ねて来て弟子入りを請う者がいた。

二五 左訓に「テキコ、ロ」とある。

二六 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892603>) (二〇二二年、三月三日閲覧)。

二七 『噺本大系第十六巻』一八〇、一八一頁。

武士は低い声で言った。「余計なことはいわなくてくれ。わしは本来剣術など知らん。軒下の看板は盗人を欺くためのものだ」

【解説】「猛犬注意」などの看板は、窃盗犯の侵入を防ぐため、犬がいるといないに聞わらず懸けることもあると聞くが、本話の「舞劍者某」の看板も同様の効果を期待して懸けたもの。次の小咄に基づいたと思われる。

○諸流劍術指南所と、筆太なかんばん。人物くさき侍来て、何流なりとも、わたくし相応の流儀、御指南下され。御門弟に成りましたいとこの口上。其元様ハ表の看板を見て、お出でござりますか 左様でござります ハテ、埒もない。あれハぬす人の用心でござります。
 (「鹿の子餅」「劍術指南所」、明和九年^{二六})

③2 酒店

【原文】臘月晦、酒家大售、當應接無暇之時、二童忽不居。主人狼狽躬當爐。須臾一童反至。主人云、歲月唯今夕何暇閑遊。答云、自今且奔走滿身汚垢適入浴耳。主人云、愚豎不識時洮贖則已。一童亦至。主人復罵之。童曰上廁。主人云、愚豎不識時放屁則已。

【書き下し文】臘月晦、酒家大いに售る。應接に暇無きの時に當たりて、二童忽ち居らず。主人狼狽して躬ら爐に當たる。須臾にして一童反り至る。主人云ふ、歲月唯だ今夕のみ。何の暇ありて閑遊するや、と。答へて云ふ、今且自ら奔走して滿身汚垢^{二九}なれば適^{三〇}たま入浴するのみ、と。主人云ふ、愚豎、時を識らず、洮贖^{三一}せば則ち已まん、と。一童も亦た至る。主人復た之を罵る。童曰く、廁に上れり、と。主人云ふ、愚豎、時を識らず、放屁せば則ち已む、と。

【現代語訳】師走のつごもり、酒場は大変な刈り入れ時。客の相手に追われて暇もないのに二人の丁稚が急にいなくなった。主人はあわてて自ら接客に当たった。まもなく一人の丁稚が返ってきた。主人が、「今年は今夜一晩だけだ。ぶらぶらする暇などない」というと、「今朝から走り回って身体じゅう垢だらけ、いま風呂を浴びてきただけです」と返した。主人は「バカな小僧だ。時というものを心得てい

二八 『嘶本大系第九卷』七頁。

二九 左訓に「アカック」とある。

三〇 左訓に「カホアラウ」とある。

ない。顔を洗うだけでいいものを」と言った。もう一人の丁稚も戻ってきた。主人はまた叱った。すると小僧は、「廁に行っていました」と言った。主人は言った。「バカな小僧だ。時というものを心得ていない。屁をすればいいだけだ」

【解説】「當鑑」は酒場で接客することをいう。「史記」「司馬相如列傳」に「相如與俱之臨邛、盡賣其車騎、買一酒舍酤酒、而令文君當鑑。」とあり、相如が酒場を構えて、卓文君に接客をさせる場面で用いられている。類話は未見。

③③ 恭奴

【原文】有一奴過恭敬。主人戒之曰、凡對人恭稱其主反為不恭。奴云、唯。異日有賓奴召其主曰、嗟來食。

【書き下し文】一奴の恭敬に過ぐる有り。主人之を戒めて曰く、「凡そ人に對して其の主を恭しく稱するは反つて不恭と為す」と。奴云ふ、「唯」と。異日、賓有るとき、奴、其の主を召して曰く、「嗟、來りて食へ」と。

【現代語訳】度を越して他人に恭しい下僕がいた。主人がそれをいさめて「他人に自らの主人を敬つて言うのは反つて不遜である」と言った。下僕は、「はい」と答えた。他日、客が来たとき、下僕は、主人を呼んで言った。「おい、来て食え」

【解説】武藤禎夫氏の『江戸小咄類話事典』^三では、笑いの内容を十種にカテゴライズしているが、「その1 愚かばなし」というカテゴリーがある。それは、様々な事について無知なことが引き起こす笑いである。本話は、そのうちの「言葉知らず」をモチーフとした笑いに収めることができよう。類話は未見。

③④ 儒者

【原文】嫖客誘儒者云、與先生遊于章臺。儒者悅曰、不佞為請業者所驅使、未嘗踏花柳地、幸賴足下之惠一時養洪然之氣。遂着禮服而行。嫖客見哂之。儒者云、足下願勿哂。苟為伉儷之儀、如之何不着禮服。

三一 武藤禎夫編、東京堂出版、一九九六年。

【書き下し文】嫖客、儒者を誘ひて云ふ、先生と章臺に遊ばん、と。儒者悦んで曰く、不佞、業を請ふ三者の為に驅使せられて未だ嘗て花柳の地を踏まず、幸ひに足下の恵に頼りて、一時洪然の氣を養はん、と。遂に禮服を着て行く。嫖客見て之を哂ふ。儒者云ふ、足下願くは哂ふこと勿れ。苟も伉儷の儀を為す、之を如何ぞ禮服を着けざらん、と。

【現代語訳】妓女が儒者を「廓で遊びましょう」と誘った。儒者は喜んで「小生、学問を教えることに忙しく、これまで廓に参ったことはございません。運良くあなた様のお情けを得ましたので、それを頼りにしばし洪然の氣を養うことといたしましょう」と言った。そこで、禮服を着て廓に行った。妓女はそれを見てあざけると、儒者は言った。「お笑いにならないでください。かりそめにも夫婦の誓いを交わすわけですから、禮服をつけるのは当然でしょう」

【解説】儒者の四角四面なさまを笑う一話である。当時、漢文を学ぶ者ならみな知っていた「浩然之氣」（『孟子』「公孫丑」）一語を借用したもの。「浩」が「洪」に記されているのは、同音かつ近似意、近似形のために誤ったものか。

『江戸小咄辞典』に、初会に「床入れ」を誘われても「われら、これが勝手でござる」といい、正座して堅くなっている「わろ（男）」の話が見える^{三三〇}。

㊥ 醉夫

【原文】酒客大醉、枕藉乎舟中。其友援乘之籃輦。輦夫走走墮^{三四}之地。酒客駭遽以為落水。即拍^{三五}泳於地上。

三二 『礼記』「曲礼上」に「請業則起、請益則起」とある。「請業」は、学業を請うことをいう。

三三 『江戸小咄辞典』（武藤禎夫編、東京堂出版、一九六五）二二九頁では、この類話の典故を『今歳笑』とするが、『噺本大系第十一卷』（一六二頁）所収の『今歳笑』には「女郎買」と題する一話が収められているものの本話の類話ではない。この『今歳笑』の他に別本の『今歳笑』があったのかもしれない。

三四 原文は「随」とあるが、文意から「墮」に改める。

三五 左訓に「オヨク」とある。そこで、「拍」とあるが「拍」に改める。

【書き下し文】酒客大いに酔ひて舟中に枕藉す。其の友援けて之を籃輦なすに乗らしむ。輦夫三六走走して之を地に墮おとす。酒客駭遽して以おも為らく水に落つ、と。即ち地上に拍泳す。

【現代語訳】客が舟の中で酔って重なり合って眠っていた。そこで、その友人が酔った客を駕籠に乗せた。駕籠かきは駕籠をかきながらその酔った客を地に落としてしまった。客は驚いて、水に落ちたと思い、地上を泳いだ。

【解説】酔客の勘違い話である。「酒客大酔。枕藉乎舟」の表現は、蘇軾『前赤壁賦』に見える「相與枕藉乎舟中、不知東方之既白」の影響を受けたものと思われる。「枕藉」は重なり合って眠ることを言う。また、「拍泳」については、『世説新語』任誕に「一手持酒杯、拍浮酒池中」とあることから、本話においても「手をバタバタしながらおよぐ」の意と解す。類話は未見。

③6 執箒

【原文】有長談客。主人常厭之。嘗語其僕云、客久坐连立箒則起去。汝盍為之。僕曰、謹受教。即日其客又來。僕持箒臨席云、家公當何處立之。

【書き下し文】長談する客有り。主人常に之を厭ふ。嘗て其の僕に語りて云ふ、客久しく坐するとき箒こりつを立た立つすれば則ち起ちて去る。汝、盍なんぞ之を為さざるや、と。僕曰く、謹しんで教へを受く、と。即日、其の客又來たり。僕、箒こりつを持って席に臨んで云ふ、家公當まさに何處に之を立つべきや。

【現代語訳】長居する客がいた。主人が、いつもこの客を嫌っていた。以前、下男に「客が長居したら箒を逆さまに立てれば立ち上がった帰るはずだ。お前は何でそれをしないのか」と言ったことがある。下僕は、「お教え承りました」と答えた。その日のうちに、その客がやってきた。下男は、箒を手にして客がいるところへ行つて言った。「旦那様、これをどこに立てましょうか」

三六 左訓に「カコカキ」とある。

三七 「连」の左訓に「サカシマ」とある。

【解説】江戸時代には、箒を逆さに立てて長居の客を帰す呪いがあつたという。その箒の立て方から生まれた笑い話も少なくない。その多くは、立てる場所を間違つたり立て方を誤つたりしたために、客ではなくその供の者に効果が出て、客は相変わらず長居のまま、というもの。『江戸小咄辞典』三六九頁「箒」の項に詳しい。次の類話は、立て方を誤つて逆にしたために、家来が帰るといふもの。○なが咄する客来る。亭主うるさく思ひ、でつちに、はうき立よと云付る。てつちうなつき、かつ手へ行、箒立んとするに、客の草履取か見て居る故、立る所なし。詮方なくて脊戸へ出見れば、竹箒有。これ幸と、さかさに立、内へ入ハ、客今ばんハ何も用事もこさらぬ。ゆるりと御咄うけ給りませふ。まづ家来をば帰しませふ。(『再成餅』「たけ箒」安永二年三八)

本話のモチーフは「長居の客と呪いの箒」であるが、客の前で口にすべきではないのに、「箒を」どこに立てたらよいでしょうかと尋ねる愚か話である。

③7 鹿剣

【原文】好色夫衣服盡風流之撰、而所帶之劍甚廉矣。其友曰美服而廉劍、一何遼落。對云、夫劍素非婦人所屬目之物也。

【書き下し文】好色夫、衣服は風流の撰を盡し、而るに帯びる所の劍は甚だ廉なり。其の友曰く、美服にして廉劍、一に何ぞ遼落たり、と。對へて云ふ、夫れ劍は素婦人の目を属する所の物に非ざるなり、と。

【現代語訳】ある好色漢、衣服は風流この上ないが、腰に帯びた刀は大変お粗末だった。その友人が「立派な着物に粗末な刀、いったいどうしてこんな隔たりがあるのですか」と言った。すると答えて一言。「本来、刀は女の目を引くものではありませんから」

【解説】見栄っ張りの武士を笑う小咄も少なくない。次の小咄は、紙子の羽織(紙子羽織)に赤く錆びたなまくらな刀(赤鯛)を身に着けた見栄を張る武士の姿が落ちとなる。

○浪人、かみこはおりに赤鯛を一本きめてあるく。跡から、もしく、おわきざしにそりが打てござります。浪人、今の風でさ。(『春

笑一刻」〔風〕安永七年〕^{三九}

「遼落」はあまり使われない語であるが、『文選』卷三十八（任昉）「為范尚書讓吏部封侯第一表」に「在魏則毛玠公方、居晉則山濤識量、以臣況之、一何遼落。」と見え、その李周翰の注に「毛玠、魏尚書、典選與用公方清正之士。山濤、晉吏部尚書、亦取正直之人。以我比二賢、一何遼落而不相及也。」とある。「差が甚だ大きいこと」を指すと思われる。

③⑧ 富翁

【原文】富翁有子三人已長。一夕皆不在家。父翁大怒、次早需之。長子先歸至。詰之曰昨宿何處。對云到叔父家而日晚故寄宿。父翁叱曰狂子勿欺。何叔父家之逼矣。仲子次至。亦詰之。對曰宿師家受經。叱曰狂子勿欺。何師家之逼矣。季子後至。詰之曰、遊宿於妓家。叱云狂子勿欺。何妓家之遊矣。

【書き下し文】富翁に子三人已に長する有り。一夕皆家に在らず。父翁大いに怒りて、次早、之を需まつ。長子先ず帰り至る。之を詰して曰く、昨きのふ何處に宿る、と。對へて云ふ、叔父の家に到りて、日晚くれ、故に寄宿す、と。父翁叱して曰く、狂子欺くこと勿なかれ。何ぞ叔父の家にか之これ逼せん、と。仲子次に至る。亦た之に詰す。對へて曰く、師家に宿して經を受く、と。叱して曰く、狂子欺くこと勿なかれ。何ぞ師家にか之これ逼せん、と。季子後れて至る。之を詰す。曰く、妓家に遊宿せり、と。叱して云ふ、狂子、欺くこと勿なかれ。何ぞ妓家にか之これ逼ん、と。

【現代語訳】三人の成人した息子を持つ長者がいた。ある夜、三人とも家にいなかった。父（長者）は非常に憤り、次の朝、息子たちが帰るのを待った。長男がまず帰ってきた。長男を「昨夜はどこに泊まった」と問い詰めた。長男は、「叔父の家に行ったが、日が暮れたので泊まった」と答えた。父は怒鳴って「バカ者が。嘘をつくな。どうして叔父の家に泊まったなどというのか」と言った。真ん中の息子が帰ってきた。この息子を問い詰めると、息子は「先生の家に泊まって学問を教えていただきました」と答えたので、

三九 『新本大系第十一卷』一三五頁。

父は、「バカ者が。嘘をつく。どうして先生の家に泊まったなどというのか」と怒鳴った。末っ子が最後に来た。問い詰めると、「女郎宿で遊んでいました」との返答。父は怒って言った。「バカ者が。嘘をつく。どうして女郎宿に泊まったなどというのか」

【解説】人は憤って叱ったことに対して偽りの言訳をされると、その憤りは一層燃え上がるものである。ましてや、二人に同様な言訳をされればなおさらである。三回目となると、往々にして相手が言訳をする前にまた前者と同様の嘘をつくはずとの先入観にとらわれてしまう。本話はそのような人間心理に基づいた笑いである。類話として落語「三人兄弟」があるが、それ以前に、明和九年の『楽牽頭』にも類話がある。それは、三番目が朝帰りに嘘の理由を言って叱られ、次男も同様に嘘を言って叱られる。長男は聞き直って本当のことを言うが、先入観にとらわれている父は、「また嘘だ」と、憤るといふもの。他に類話として『独楽新話』「朝帰り」(天明八年頃)^{四〇}がある。次に『楽牽頭』「三人兄弟」を示す。

○兄弟三人ながら夜あそひに出、母、親父のきびしきをいとひ、どらどもがはやく帰ればよひに。親父どのが又おこらしやろうとあんずる所へ、弟が帰る。おのしハどこへ行た。謡講に参りました。なに、謡でハおじやるまい。又二男、のろりと戻る。コレ、もふ何時だとおもやる。九ツをうちましたハ。ハイ。けんくわの中へはいりまして、手間を取りましたと、あちら向て舌を出す。何、けんくわでハおじやるまい。又そふれうの甚六戻ル。母、目をむきたし、おのれが身持がわるひから、弟がまねをする。今迄ここに居やつた。もふ親父どのに知れても、そせうハせぬ。御尤て御座りますが、友達のつき合で、唯今迄吉原におりました ハテナ、そふでハおじやるまい。(『楽牽頭』「三人兄弟」^{四一})

四〇 『新本大系第十二卷』一三九頁。

四一 『新本大系第九卷』三九頁。

三、『笑門』における笑いの特質

以上、『笑門』全三十八話について訳読と解説を行った。小稿を終えるに当たり、『笑門』全体の特徴と文化史的背景について私見を述べたい。

前稿『笑門』を読む(一)で示したように、武藤禎夫氏は、「漢文体小咄本について」において、具体的作品には触れないものの、「一読して上乘の内容に驚いた。第一に行文が小咄にふさわしく簡潔であり、既成の笑話本に依拠した話のほかに、独特の新作も十数話見られた。」と述べられているが、この点についてまず言及したい。「既成の笑話本に依拠した話」という点については、すでに個々の解説でも指摘したが、本書に収められた全三十八話のうち、二十二話において類話の存在を確認した。そのうち、全十六話については、小咄本隆盛期の明和・安永期の作品集に収められている小咄で、それよりやや早い享保、寛延にある三話を加えれば、全十九話が江戸中期の小咄にその源を求めることができた。また、類話という点では、小咄のみならず落語にも類話の存在を指摘することができ、第三十話「誣盗(泥棒を欺く)」、第三十八話「富翁」がそれである。両話とともに、繰り返し対話によって展開するもので、今日でもよく知られる。そのうち第三十話は落語「出来心」、第三十八話は落語「三人兄弟」の類話である。本書が編まれた寛政年間は、寄席も人気を博した時期である。本書の特徴を形作った文化的背景の一つとして、当時盛んであった寄席の興行も念頭に置かなければならないだろう。

武藤氏が指摘する「独特の新作」については、新作という点で首肯できる。全十六話には今のところ類話を見いだせず創作の可能性が高い。その創作に際して取り上げるべき特色の一つは、中国古典をさりげなく入れ込んで一話を作る点である。例えば、第七話「求富」がそれである。これは、屋根に上って星をとろうとする小咄「星取り竿」にヒントを得た笑話ではあるが、天をとる理由を『論語』の一句「富貴在天」を挿入した一句で切り返す一話である。また、第十四話は、和尚と檀家のやり取りの中で女性を寺内に囲っていることが露呈する一話であるが、何か隠していないかという檀家の問いに、『論語』の「吾無隱乎爾(私に隠しているものはない)」の一句をさりげなく入れ込んだ笑話である。「吾無隱乎爾」は、『論語』においては、「学問の奥義を隠したりしない」という孔子の教育姿

勢を示すことばであるのに対して、本話では「女性など隠していない」という意であり、そのシチュエーションの落差が笑いを生み出している。初期の漢文笑話集は、「四書五経」の語句を「落ち」に用いることが型の一つであったが、往々にしてその語句を使うとの意識が先にあった。しかし、『笑門』においては、ストーリーが先にあり、その中で、偶々ふさわしい古典の語句をさりげなく用いる傾向にある。

その一方で、個々の解説中でも述べたが、基づいた小咄には小気味よい会話の応酬や心情表現があったが、『笑門』においてはそれが十分に漢訳されているかという点は疑問が残る。例えば、第二十一話「債者」の掛け取りと女郎の問答である。基づいた小咄では返せ返せぬとの三度の押し問答が、本話では一度で終止してしまっている。また、第二十話「饗筈」である。筈を盗んだのは「取り立ての筈を採って客を喜ばせたかったのだ」という小咄にあった主人の思いが漢文訳されていないのである。仮に原作にあるやり取りの妙や行為の裏にある心情が十分に漢訳されていたならば、笑いの質も更に高まったであろうと思われる。つまり、小咄の円熟に比べて、本笑話集における翻訳された笑話においては、人間心情の機微を十分に表現しているとはいえない側面もあることを指摘したい。

さて、前稿において、本書の作者は、朱子学を学んだ文人であろうと推察したが、中国の古典のうち経書等の語句の使用からもそのことを裏付けることができる。例えば、『孟子』（第四話、第三十四話）、『論語』（第五話、第七話、第十四話）、『書経』（第八話）が用いられ、同時に、詩文の一句が、蘇軾「前赤壁賦」（第三十五話）や『文選』所収の任昉「為范尚書讓吏部封侯第一表」（第三十七話）から引用されている。「前赤壁賦」は、当時、作文の教科書としてよく読まれた『文章軌範』や『古文真宝』などに収められていて、漢文の手習いとしてはよく知られていた作品である。『文選』については、すでに慶安年間に訓点をつけて翻刻された『六臣註文選』が販売されていて比較的容易に目にする事ができた。そのようなことも古典語句使用の背景にあるだろう。

ついで、本書の特徴を形作る笑いの型について触れたい。全体を通じて簡潔な対話によって作られていることが多く、中でも、理解の食い違いから引き起こされる笑いが多い。例えば第十二話「新衣」である。夫が妻に裁縫を頼んだが、妻は逆さまに縫う。あきれて苦笑いする夫に、妻は、「あなた嬉しいのね」と返す。また、第二十二話「癡子」は、息子の「生計の術」を心配する父に、「大食いだから食っていける」と息子は答える。二話ともに理解の食い違いに起因した対話を主とする愚か話であり、これ以外にも本笑話集にお

いては類似の型が多い。翻って行為描写のみの笑いは、第二十八話「匏瓜」と第三十五話「醉夫」などに限られる。

また、笑いの対象では、他の作品集によっては、武士や和尙など特定の職業の人や特権を持つ人々が多いが、本書は極めて多岐にわたり、対象の持つ限定性はない。ある職業や身分のある人を諷刺する笑いというよりは、純粹に、何が面白いのかという点に笑いの関心が置かれているといえよう。それゆえか、『笑堂福聚』^{四三}にあったような刺す笑いはなく、また、『訳準笑話』^{四三}に収められているような艶笑話もない。

漢文笑話集『笑門』の出版は、江戸後期の寛政年間であった。江戸中期以降、中国書からの翻訳である『通俗三国志』『通俗西遊記』などが出版されて、同時に、『太平記演義』『忠臣庫』などが創作されるまでになった。つまり、「四書五経」や詩文の雅なる漢文世界に加えて、小説や笑話など俗なる漢文世界を同時に受容するようになったのである。また、藩校や私塾の増加によって「教育爆発」の時代^{四四}とも言われるように、漢文学習者そのものの裾野の広がりもあった。一方、前述のように、寛政ごろ、江戸では落語の流行が見られたと言われ、「笑い」受容の環境があった。このようなことが漢文笑話を楽しむことにも繋がったとみることができよう。「笑門叙」で見たように、本書は、漢学にありがちな型苦しい学びにあって「當足散却其鬱情（憂さ晴らし）」^{四五}の役割を果たしたのである。以上、江戸後期の『笑門』の出版は、いわば、学びの層の変化拡大と笑いを享受する時代がもたらした文化事象の一つともいえる。

小論は、令和三年度科学研究費補助金基盤研究（C）「江戸明治期漢文笑話集の訳読と研究—江戸後期から明治初期の漢文笑話集を

四二 磯部祐子「『笑堂福聚』を読む（一）」（富山大学人文学部紀要第七十一、二〇一九・八）、磯部祐子「『笑堂福聚』を読む（二）」（富山大学人文学部紀要第七十二号、二〇二〇・二）、磯部祐子「『笑堂福聚』を読む（三）」（富山大学人文学部紀要第七十三号、二〇二〇・八）参照。

四三 磯部祐子「從中國笑話到日本小咄」（『文匯學人』第三〇八期、二〇一九年）参照。

四四 入江宏「概説」（『講座日本教育史』二、「近世Ⅰ／近世Ⅱ・近代Ⅰ」二〇九頁、第一法規出版、一九八四年）。

四五 磯部祐子「『笑堂福聚』を読む（一）」（富山大学人文学部紀要第七十一、二〇一九・八）二四〇頁。

中心に」(研究課題番号18k00313、代表・磯部祐子)の研究成果の一部である。